

謂様に依て胡蘆を畫けるもの亦少からざりしか爲に世の工藝美術を見る事極めて軽く因襲の久しき今に尙僅に藝苑の末班に列すと爲し或は正に一籌を繪畫彫塑に輸せりと爲す 共に謬れるの甚しきものにして畢竟するに均しく理想の之に逆發せる所以を解せざるものゝ言たるに過ぎずと雖とも一面作家の態度亦憚焉たらざるものありしに職由せずんばあらず 然も現時猶過渡期に屬し或は舊法を墨守して巧に誇り他は新様を追ふて徒に奇を衒ひ渾然醜熟能く醇境を拓開するものあらず 世人をして益工藝美術の眞趣を解せざらしめ斯道の發展之が爲に塞かれ社界の待遇重きを加へず作家の地位向上するに由なし 眞に慨嘆に堪えざるなり 吾人同窓の身を工藝美術界に致せるもの既に三百五十人奮起協力して以て道に盡し先づ自ら覺めて以て導かば得る所蓋し料るべからざるものありて茲に一新時代を劃出するの秋あるや必せり 仍て茲に本會の組織を企つ 冀くば 贊に吝なる勿れ

發起人(イロハ順)

石田 英一	板谷 波山	六角 紫水
堀井 政吉	千頭 庸哉	渡邊 香涯
香取 秀眞	神矢 龍珉	吉野 富雄
田雜 五郎	高野 重人	津田 信夫
辻村 松華	海野 清	野口 六三
小岩 峻	坂口 朧	澤田 誠一郎
島田 佳矣	清水 龜藏	杉田 精二

(『東京美術学校校友会月報』第十八卷第七号。大正九年二月)

同会は會員三百五十余名を有し、本校工芸部内に事務所が置かれ

た。上出月報第十八卷第八号(同年二月)に「此程實行委員を擧げ官展に工藝美術科設置の建議、並に同意を求むる爲め、文相始め帝國美術院會員宅を歴訪して意見を開陳したり」とあるように、同会は 大正九年から帝展参加運動に乗り出す。

⑫ 海野美盛死去

本校金工科主任教授海野美盛は、腎臓炎のため療養中だったが、脳溢血を併発し、大正八年九月二十二日午後五時、上野桜木町の自邸にて死去した。『東京美術学校校友会月報』第十八卷第四号の「藝苑叢報」に、本人および遺作銀製寿老及獅子置物の写真、略歴、葬儀の報告と正木直彦学校長の弔詞全文が掲載されている。また、九月二十三日の東京朝日新聞、時事新報にも逝去の記事がある。

海野美盛は、水戸派彫金の大家海野盛寿を父として、元治元年十月十五日東京下谷池の端に生まれた。幼少より美術を志し、父より金屬彫刻を学ぶとともに、酒井道一、河鍋曉齋らに日本画を学んだ。明治二十二年には古美術研究のために奈良、京都を訪れ、この期間、小倉惣次郎に就き西洋彫塑も学んでいる。明治三十一年二月に本校助教、同五月教授となる。同三十三年のパリ万博には私費を投じて渡欧。同三十六年、第五回内国勸業博覧会の賞牌製作に關して欧米に出張。同四十三年日英博覧会に際しても、審査官として渡英している。日本の伝統的な彫金技術に西洋彫刻の造形を加味、日本彫金の近代化に努めた。近く帝室技芸員に任ぜられることになっていた。

葬儀は、九月二十五日午後一時谷中齋場にて仏式で行われた。